



私は今
梅花園の
深層へ足を
踏み入れよう
と
している

大きな私じゃ
ダメれしゆか？
春原
シュン編



これは……
梅花園で……
私が体験した
アーカイブ……
である……

シュンがサイズ
の合わない服を
着ているという
事実が私の思考
を狂わせていた



彼女が普段から
甘えたい願望が
あるのは：
気が付いてはいた
しかし：：

彼女の屈託のない
瞳は期待に溢れて
見えた：
私は思わず生唾を
飲んだ：：

しゅんしゅん……

早く……

私は先生としての
葛藤の中……
いきり立つ肉棒を
無意識のうちに
あらわにしていた

彼女がそれを目にした
刹那：『はやくう』と
聴こえた気がした
これでいいのかい？
私たちは目と目で
会話した気がした

布ごしに感じる
彼女の熱が……
私の肉棒の先端に
じわりと伝わった

眉を顰め見つめる瞳は
うっすら濡れて見えた
甘えたような震え声
鼓膜を刺激した瞬間
私の理性は崩れ去った

私は夢中で布一枚
挟んだ彼女の秘部
を先端でこねくり
回した

徐々に荒くなる彼女の
息づかいが私の肉棒へ
血流を巡らせていくの
先走りがせり上がるの
感じていた

ズル

ズル

彼女の表情が
快楽を感じ始めた
のを確認した瞬間
艶やかな唇が動いた

はぁ

あ

は

あ

「お薬くらさる」

『お薬くらさる』
その言葉の意味を考える
暇もなく私は夢中で
湿った布越しに肉棒を
擦りつけた……

ズン

ズン

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ

彼女と目が合った瞬間、肉棒から大量の『おくすり』が噴き出した

言葉にならない刺激で私の下半身は大きく震え熱く湿った彼女の秘部へ先端を必死に擦り付けた

どろり

どろり

私の『おくすり』が
秘部にしみこみ
さらなる刺激が
私を……襲った

はあ

あ

あ

い
ふ

ど
ろ
ろ

勢い任せに擦りつけた
鈴口は布越しの突起に
触れ肉棒は『おくすり』を
まき散らした……

彼女は切なげな表情
で私を見つめている
『もつと……』
そう呟いていた

普段の春原シユンからは
想像もつかない姿に私は
「悪い子だ」そう囁き……
彼女の願望に答える覚悟
を……決めた

ぬ
ち
や

ん

は
あ

あ

は

あ

「きゅん」
「きゅん」
「きゅん」

は

は

は

彼女の身体を圧迫し
ている服をゆつくり
と上へと脱がした

はあ

は

あ

むわ

あ

ふ

ぷるんと露わになった二つ
の果実：
薄っすらと艶めき熟れた
甘い香りが私の鼻腔を
刺激した

はあ

はあ

はあ

甘い吐息が全身を
包み込んでいくの
を感じる……

はぁ♡♡

あ♡♡

は♡

あ♡

二つの果実の
窪みから漏れる
蜜は私を更なる
深みへと誘った

彼女の深淵はしつとりと
確かなぬめりが
みてとれる

「いくよ」私はそう言った
返事はなかった
彼女の深淵は口を開き
ぬちやあと答えてた

肉棒が深淵の入口を塞ぐ
小さな入口が異物の侵入
を拒んでいた……

小刻みに震える身体は
これから起こるであらう
ことに期待と不安が
入り混じっている

ゆっくりと奥へ……
肉壁がなんとも異物を
外へと押し出そうとする

その圧迫感が私の肉棒を
包む度に何度も先走りが
先端から漏れ出ているの
を感じる……

声にならない声が
彼女の唇から漏れ
深層への到着を
意味していた

あゝ

あゝ

は

あゝ

絡みついた肉壁が肉棒を
舐めまわしている様な
甘い感覚が全身を襲った

ズク

ズク

ズク

ズク

は

は

は

そこからはもう
一心不乱だった
ひたすらに肉棒を
突き立てていた

「いやらしい顔だ」私は
囁いていた：
卑猥な音が部屋中
鳴り響く：

恥ずかしさに顔
隠したと同時に
二つの果実の先端
から大きな芽が

にゆるりと顔を出した
私の背徳感は一変する物
へと変化していく



二つの肉芽は
びくんと震える
間違いなく彼女が
興奮している証拠

はぁ♡

あ♡

は♡

あ♡

その大きさに
私は：：
「瞼のシャッター」
を何度も切った

ヒッ♡

私は耳を疑った……
『おしやぶり』
そう聴こえたからだ。

はっ
フル

ぶっ
フル

ほお
しいや
ぶり……

おっ
フル

あッ
フル

おっ
フル

はっ
フル

フル

おっ
フル

フル

しかし彼女が求めるので
あればおしやぶりさせる
のは致し方ない事なのだ

フル
ピクッ
フル

フル
ピクッ
フル

フル
はっ
フル

フル
はっ
フル

言われるままに
私は「おしやぶり」を
手渡していた

は フル

ふ フル

ちゅしやぶり

は フル

あ フル

は フル

フル

あ フル

フル

彼女は私を見つめながら
「おしやぶり」をゆっくりと
口元へ運んだ……

フル

あ フル

あ フル

フル

あ フル

あ フル

あ フル



見せつける様に
ゆっくりと
「おしやぶり」を
口内へ運んでいく

「おしやぶり」は彼女に
とって甘えるの最上級品
なのだろうか……



「おしやぶり」をするには
あまりにも大きく卑猥な
彼女はちゅぱちゅぱと
音を立てて私を呼んだ



「おしやぶりは
もつと小さい子の
物れちゅよ?」

無意識に赤ちゃん言葉で
そう囁いていた：
驚きと興奮に
腰を叩きつける

は
は
は

は
は
は

ちゅぽ
ちゅぽ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

あ
あ
あ

は
は
は

は
は
は

は
は
は

は
は
は

は
は
は

は
は
は

は
は
は

は
は
は

は
は
は

は
は
は

[illegible]

A detailed illustration of a young woman with long black hair, cat ears, and a flower headband. She is wearing a red dress and has a pink pacifier in her mouth. She is surrounded by Japanese text and hearts, suggesting a playful or affectionate theme.

お互い快感に
身を委ねる
深層は痙攣し
おくすりを泡立たせた

搾り取られる感覚に
酔いしれ肉棒は奥の熱い唇
に何度もおくすりを
塗りこんでいった

彼女が何を求めているのかは、わかっていた
痙攣する姿に私の肉棒
が治まらない

「お外にもおくすり
塗×2しましゅうね」
私はいきり立った肉棒を
ゆっくりと動かした

私の全身洗礼の
ピストンにより狂う
彼女の声と表情……

肉壁の締め付けが強さを
増して痛みすら感じる
快樂に狂うシュンたんを
汚したいと心から思った

深層の唇が肉棒を
銜えこんでいるのが
わかる……

「シンタさんはエッチで
悪い子でしゅね」そう囁いた
おくすりという名の精液を
確実に奥へ塗りこんでいく



彼女に限界が近い
ことがわかった
このまま一気に……

「いいかい？ お外にしっ
出すからね？」受け止めろ
遠回しにそう告げ
ラストスパートをかけた



かつて見たことのない卑猥な顔に私の欲望は爆発した



「いけ...いけシユンたん
ほらいけ!」夢中で腰を
叩きつける。2人の体液と
肌を打ち付けあう音が響く

はぁ
はぁ
はぁ

はぁ
はぁ
はぁ

R-1/4

R-1/4

R-1/4

R-1/4

R-1/4

フル

フル

フル

フル

フル

フル

フル

フル

はぁ

はぁ







絶頂した彼女は
意識朦朧としていた
私はゆっくりと肉棒
をあてがった

「お掃除しましゅよ？
いいれふね？」そうつぶやき
おくすりまみれの肉棒を
震える深淵へ差し込んだ

絡みついた肉壁と
深層の唇が肉棒に
残ったおくすりを
吸い取っていく

「いいれふよ、あまった
おくすりもしっかり塗×2
しましうね」そう呟き
彼女を孕ませたい一心だった

全身を包む快樂の
余韻にお互い小刻みに
震えていた

私は彼女の願望に答えられたのか：：これでもよかったのか
そんな事が頭のすみを
よぎっていた：：



以上が梅花園で
体験したアーカイブ
である

しかし……これは
これから起こる出来事の
序章に過ぎないことを
この時の私はまだ知らない







